

歴史

G T活動の開始

本市において、G Tの教育旅行受け入れが始まったのは昭和63年の旧衣川村。当初はサンホテル衣川荘の誘客の目的で、宿泊は衣川荘が農業体験は農家が受け持つものとしていました。しかし、衣川での修学旅行を計画していた高校側から「ぜひとも農家に泊りたい」との強い希望があり、これにより農家民泊を伴った教育旅行の受け入れに踏み切りました。民泊経験もなく、不安で難色を示す農家を説得し、G Tの原型をつくりました。受け入れ前は難色を示していた農家も、実際に受け入れを行うと、ほとんどの農家の反応は良く「またやってみたい」との声が多数ありG Tがスタートしました。初年度の受け入れは、1校

のみで生徒数は557人。そこから平成10年度までは、年間の受入数が1〜3校程度で推移しました。その間、旧衣川村や農協などが橋渡し役となった農業体験の受け入れもありました。

11年度には、体験を希望する学校数および生徒数が増加。旧衣川村の農家だけでは受け入れが難しくなりました。これがかつかけとなり旧胆沢町に「いさわグリーン・ツーリズム推進協会」が発足。行政区域を越えて受け入れを行うようになりました。

その後、16年度に、大阪府の高校生320人の受け入れを行うことになり、旧前沢町を加え連携を拡大しました。

また、市内では産直センターや農家レストランなどが開設され、さまざまな形で農村と都市との交流が活発に行われるようになってきました。

G T組織の発展

市町村合併を契機に、3組織の連合体として「おうしゅうG T推進協議会」を設立。



おうしゅうG T推進協議会

村上寛 会長(71)

平成20年から同協議会の会長を務め、年間5校〜10校程度の教育旅行を受け入れ。水田面積は2.3haで、畑の面積は40a。妻、長男夫婦、孫の5人家族

予定していたものの、東日本大震災の影響でキャンセルが相次ぎ、7校947人と、予定の3割程度の受け入れにとどまりました。(下表)現在は、組織体制を万全にしつつ、P R活動を積極的に展開したことが功を奏して、年間の受け入れ数は回復傾向にあります。26年度は、400人規模の受け入れを予定。「東北各地を見渡しても、これだけの規模で受け入れ可能な地域は、なかなかありません」と、村上寛会長は胸を張ります。や

■グリーン・ツーリズム(G T)とは

ヨーロッパでは、都市住民が農村に長期滞在し、自然や文化、さらにはその地域の人たちとの交流を楽しむ余暇活動をG Tといます。長期に滞在するヨーロッパのG Tに対し、日本は都市と農村の距離が比較的近く、長期休暇が取りにくい労働環境のため、短期滞在のG Tが主体となっています。なお、G Tは日帰りでの農業体験なども含まれており、宿泊に限定されるものではありません。また、団体行動を中心とした旅行形態を好むなど、日本人の価値観や生活様式に合致したG Tが展開され「日本型G T」と表現されることもあります。

G Tは、農村住民と都市住民との交流が基本で、比較的安価にゆったりと過ごすのが特徴。都市住民は、普段接することのない自然体験や農業体験、加工体験などの農村の暮らしを体験し、農村に伝わる郷土料理を味わいます。また、農村住民が都市住民に提供する農家レストランや宿泊サービスもG Tとして位置付けられ、農村と都市が幅広く交流することを指します。

- 農産物を介した活動(産直・直売所、農家レストランなど)
- イベント(地域の祭り・農林に関する祭りなど)
- 農業・農村体験(市民農園、田植えや稲刈りなど)
- 学校教育における農村や農業との触れ合い
- 自然の営みとの触れ合い

現状

おうしゅうG T推進協議会の現状

市町村合併以降、おうしゅうG T推進協議会は、年間約2千人の規模で受け入れを継続。22年度は22校2930人と、順調にその数を伸ばしました。しかし、23年度は当初25校3500人の受け入れを

新たな体制で受け入れを開始しました。20年度に平泉町の協議会、21年度には水沢区と江刺区の協議会がそれぞれ加わり、県内最大規模の組織へと発展しました。おうしゅうG T推進協議会は、発足当初の流れもあり、主に中高生の教育旅行(修学旅行・自然教室など)の受け入れを継続し、農村体験を提供。現在、会員数は205人になりました。

はり、東日本大震災の影響は大きく、ほかの地域でも震災前の状況への回復までは、なかなか難しいようです。

教育旅行としてのメニュー

教育旅行の受け入れの形は、生徒たちが農家民泊して農村生活を体験するというものです。おうしゅうG T推進協議会では、1泊2日または2泊3日の行程で、農家1戸当たり3〜5人の受け入れを基本にしています。日帰りの農業体験の受け入れも対応しています。水稲作業や畑作業はもちろんのこと、畜産や花き、果樹などから林業の作業まで多種多様です。「農業体験のために、意識して水稲作業などを残しておく農家もあります」と話す村上会長は、「マンション暮らしで、土に触れたこともない、どのように野菜を栽培しているか分からない、そんな子どもたちと一緒に過ごすのはとても新鮮です」と目を輝かせます。おうしゅうG T推進協議会では、農業体験だけでなく、農家の人と一緒に食事の準備

衣川区での対面式の様子



■表 年度別の教育旅行受け入れ数と登録農家数

	学校数(校)	生徒数(人)	登録農家数(戸)
20年度	14	2,351	153
21年度	16	2,071	117
22年度	22	2,930	173
23年度	7	947	222
24年度	14	1,762	215
25年度	19	2,763	205
26年度	20	3,372	—

※26年度は見込み数

や片付けをしたり、寝床の用意をしたりと、農村での生活を丸ごと体験できるメニューを提供しています。「子どもたちに安全に過ごしてもらうため、安全講習会や衛生講習会に必ず参加します。事故などがあると信用を無くしますから」と話す村上会長は、「救命講習会などにも参加したいですね」と語っていました。おうしゅうG T推進協議会では、オーライ!ニッポン大賞を受賞。村上会長は、「会員皆さんの協力のおかげ」と感謝の気持ちを話していました。

オーライ!ニッポン大賞 グランプリ受賞

おうしゅうG T推進協議会は、農村の魅力を生かし、継続的に農村生活体験の教育旅行を受け入れていることが評価され、第11回オーライ!ニッポン大賞(オーライ!ニッポン会議と農林水産省の共催)のグランプリを受賞しました。

この受賞を機に、さらに受け入れ体制の強化を進めながら、本市における農村と都市との交流が継続、そして発展することが期待されます。